

メディア学部における導入教育の再導入(3)

小 瀨 究

Remake of introductory education (3)

Kiwamu Obuchi

Abstract

In this study, I consider the trend in introductory education at the Faculty of Media Studies from 2008 to 2010. I describe our attempt to revise the introductory education, following the establishment of the Makuhari Media Studio in early 2008. The aim is to lead to a change from “double campus, double standard of education” to “single campus, single standard of education”. When we decided on the change, we attached importance to unification and continuation of education.

はじめに

前稿¹⁾ から3年が経とうとしているが、その間に城西国際大学メディア学部環境は大きく変わった。変わった点を大別すれば、次の2点になるだろう。

1点は、複数のキャンパスでの学びが始まったことである。メディア学部の前身の人文学部メディア文化学科のときから、メディア学部は東金キャンパスのみでその学びを展開してきた。プロジェクトベースの学びも多いことから、学外での活動は多かったものの、キャンパスはひとつであるため、「基礎ゼミ」²⁾ はひとつのキャンパスで実施されてきた。ひとつのキャンパス、ひとつの学び、これがこれまでのメディア学部の学びの形であった。この状況に変化をもたらしたのが、2008年2月の幕張メディアスタジオ（以下、幕張キャンパス、と表記する）の開設である。このキャンパス展開によって「基礎ゼミ」を運営実施するうえでの前提が大きく変わり、その運営実施方法について再考せざるを得ない環境になった。

もう1点は、学生の学びの目標・目的が先鋭化したことである。メディア学部の学びは、クロスメディアの学び、つまりメディアの各分野（情報・映像・デザイン・サウンド）をクロスして網羅的に有機的に学び、さまざまなメディアに関するハード及びソフトを使いこなし、各自のイメージを具現化する力がつくものとなっている。この学びをベースとして、上記の新たなキャンパス展開を機に、幕張キャンパスに「IT・映像コース」を立ちあげた。メディア学部において“コース”を謳うのは初め

¹⁾ 小瀨ほか[2008]。

²⁾ 導入教育やリメディアル教育を目指した基礎教育を行う科目名である。建学以来実施されてきたもので、2011年度の1年生のカリキュラムよりメディア学部においては「メディア制作ゼミ」という科目名に変更される。

てのことであった。クロスメディアの学びをベースとしながらも明確な分野を明示したことによって、幕張キャンパスでの学びを希望する学生の目標・目的は、これまでの学生よりも明確なものであり、先鋭化されたものであった。一方でこのことは、東金キャンパスでの学びの目標・目的もより明確にした。東金キャンパスでの学びの目標・目的と幕張キャンパスでの学びの目標・目的とが、単に地理的な違いということだけでなく目標・目的の方向性の違いとして表れてきたのである。これは、両キャンパスで展開することになった「基礎ゼミ」の運営実施方法及び内容にも大きな影響を与えた。

本稿では、上記 2 点の環境変化のなかで生じた課題を整理し、2011 年度からのメディア学部の新たな展開へ向けての展望を示したい。

1. 複数キャンパスがある場合の運営方式

(1) 運営方式の模索

複数のキャンパスで授業が展開されることが決定した後、必修科目を中心に、どのように学生たちに対して授業を展開していくことが望ましいかが議論された。語学の授業、パソコン関連の授業、そして「基礎ゼミ」は、これまで全員に同じ教育内容を提供してきた。このうち、語学の授業、パソコン関連の授業は、授業時間帯を同一時間帯にしないよう設置するなどし、同教員がそれぞれのキャンパスで授業を実施できるよう工夫したり、同一テキストを用いてそれに完全に沿う形で授業を進めるよう変更したりすることで対応を図った。

一方、「基礎ゼミ」については、以下の 3 方式での検討が行われた。

(2) 合同方式

合同方式は、これまでと同様に、全学生に対し、同一の教育内容を提供する方式である。同一資料に基づき、原則、マニュアルに沿って教育を行うものである。この方式のメリットは、これまでの準個別クラス（少人数クラス）での運営と大差がないことや遠隔通信システムを使用して全学生に同時に授業を実施することも可能であることである。このほか、全学生が同一の情報を享受することになり、授業運営側の意図するものを全学生に対して提供することができるため、学生個々のレベルの把握や学びの進捗の度合い、また成績評価におけるモノサシの調整が不要などがある。一方、デメリットとしては、教室（キャンパス）が地理的に離れているため急な変更に対応できないこと、事前の打ち合わせによる意思疎通がスムーズに行われないこと、また地理的な隔たりが心理的な隔たりにも影響し異なる学びへの欲求に結びつく（違う場所にいるのだから違うことをやりたいといった差別化意識のようなもの）ことなどがある。

(3) 一部分離方式

一部分離方式は、同一内容の部分と異なる内容の部分を持ち、異なる内容の部分は各キャンパスの学びの特徴などを踏まえて、それぞれの運営担当者の裁量によって適宜内容を決定し、実施する方式

である。この方式のメリットは、これまで実施してきた導入教育の内容を一部踏襲しながらも、新たな学びの展開に沿う内容を盛り込むことができる形であることである。大学の各授業に関連するテーマ、資格に関連するテーマ、レポートやプレゼンテーションに関連するテーマといった基礎的なテーマは、学びの目標・目的の違いにかかわらず必須のテーマでもあるため、踏襲して実施すべき点であると考えられる。また、一方で、特に新しい学びの展開として設置された幕張キャンパスでの実施内容には、新しい取組みが盛り込まれることが望ましいともいえる。従来の内容と新規の内容の相乗効果を狙うことができるのがこの方式である。デメリットは、新旧の内容のバランスとキャンパス間の内容のバランスとの調整の難しさである。内容が異なる部分について、各キャンパス担当者の裁量を優先した場合、異なる部分の比重が大きくなることが予想され、内容の調整、学生の状況の把握、成績評価の調整に困難さを伴うことになる。

(4) 完全分離方式

完全分離方式は、ふたつのキャンパスでまったく異なる内容を展開する方式である。それぞれのキャンパスをベースに通学している学生の学びの目標・目的の違いをより「基礎ゼミ」にも反映させようという考え方によるものである。メリットは、それぞれのキャンパスの学びの目標・目的に沿う内容が展開しやすいことである。特に、幕張キャンパスでの学びは「IT・映像コース」と謳われるカリキュラムが設置されているため、本コースにマッチした導入教育が望ましいともいえる。デメリットは、ふたつの学びを展開することによる導入教育のコンセプトの再定義と方向性の調整とを行わなければならない、それは必ずしも容易ではないということである。ひとつの学びにより確保されるひとつの学年を通じてのある一定水準の共通の学びは、学年全体の統一的な基準に基づく学びの状況の把握や評価システムの運用を可能とした。しかし、ふたつの学びの採用は、統一的な基準に基づく状況把握や評価に曖昧さが出ることは避けられないことになる。

2. キャンパスと学びと

(1) ふたつのキャンパス、ふたつの学び

幕張キャンパスの展開が「基礎ゼミ」の実施にも大きく影響し、前項のような3方式が検討された。検討の結果、2008年度は一部分離方式を採用し、2009年度は完全分離方式、つまり、ふたつのキャンパス、ふたつの学び、を採用することとなった。

2008年度に採用された一部分離方式の実際の内容は、1年生の科目にあたる「基礎ゼミⅠ」では、テストは共通事項とし、それ以外の部分については、各キャンパスで異なる内容を実施することとした。2年生の科目にあたる「基礎ゼミⅡ」では、従来実施してきた学年全体でのアイディアコンテストを踏襲する形となり、ほぼ両キャンパス同様の内容が展開されるという合同方式が採用された。「基礎ゼミⅠ」について一部分離方式とした理由は、1年生については、評価指標として統一的な基準は残すべきという点と資格取得関連の模擬テストなど、学びの目標・目的の違いがあったとしてもその

基礎となるような分野については、目標・目的の如何にかかわらず取り組むべきものであるという点から採用に至った。「基礎ゼミⅡ」を合同方式とした理由については、これまで学年全体でひとつの学びを実施してきたことと実施するアイディアコンテストという内容に鑑みて、ひとつの学びの継続が望ましいと判断した。

2009年度は、完全分離方式を採用し、「基礎ゼミⅠ」、「基礎ゼミⅡ」ともに各キャンパスで異なる学びが展開された。「基礎ゼミⅠ」が一部分離方式から完全分離方式になった理由については、2008年度に一部分離方式を実施した理由の重要性が高いことを理解できる一方で、“工房”とも位置づけた新しいキャンパスでの新しい試みへのさまざまな欲求、ニーズ、環境が背景にある。「IT・映像コース」では、幕張という地の利、環境を生かして、なにかが随時生まれるという“工房”がイメージされている。したがって、学びのスタイルのなかに占める制作作業がこれまで行ってきた学び以上に重点が置かれていた。そのため、「基礎ゼミ」の位置づけがそうした制作作業を中心とした学びの基礎を構築するものとするのが望ましいとされ、その目標・目的に沿って内容が再構築されたのである。授業の実施時間も東金キャンパスとは異なる曜日・時限に設置され、「基礎ゼミⅡ」と合同で実施することがほとんどであった。「基礎ゼミⅡ」が合同方式から完全分離方式に移行した理由については、上記の「基礎ゼミⅠ」の理由に加え、すでに2008年度には一部分離方式で実施していたことから、移行に伴う問題は小さいと考えたからである。

(2) 再び、ひとつのキャンパス、ひとつの学び、へ

ふたつのキャンパス、ふたつの学び、の問題点を明確に示すために「基礎ゼミ」のうち「基礎ゼミⅠ」に焦点をあてることにする。学生の学びの状況や外部環境に鑑みて、新しい取組みは1年生の科目である「基礎ゼミⅠ」に毎年度採用されたが、そこに大きな問題の種が存在した。

2008年度からの「基礎ゼミⅠ」の実施方式は、以下のような状況であった。

2008年度：ふたつのキャンパス、ふたつの学び（一部分離方式）

2009年度：ふたつのキャンパス、ふたつの学び（完全分離方式）

2010年度：ひとつのキャンパス、ひとつの学び（合同方式）

前項で2009年度までの状況について触れたが、2010年度は、2009年度までに生じた問題を解消すべく、再び、ひとつのキャンパス、ひとつの学び、へと回帰したのである。2009年度までに発生した問題の主な点は以下の2点である。

①統一性

統一性の問題には、横の統一性と縦の統一性の問題とがある。横の統一性とは、学年全体での学びの統一性を指し、縦の統一性とは1学年から2学年への学びの統一性を指す。

横の統一性の問題については、すでに一部分離方式と完全分離方式のデメリットの箇所にて指摘したことも含まれるが、一部分離方式では、各キャンパス担当者の裁量部分に問題点がある。学びの内容が望ましくないということでは決してない。学びの内容が異なった場合の内容の統一性、たとえば難易度について、学生の状況の統一性、たとえば作業進捗度について、成績評価の

統一性、たとえば授業課題の完成度について、こうした統一性の問題がある。完全分離方式では、これらの問題がより顕在化し、教員の過去の運営経験や内容の調整、相互のコミュニケーションを通じて調和を図ったが、統一的な基準に基づく状況把握や評価に曖昧さがあつたことは否めず、ごくわずかであつたが、学ぶ立場の学生からもその曖昧さに対する指摘があつたのは事実である。

縦の統一性の問題については、カリキュラムに起因するものであるともいえる。学びの場を広げ、また学びのスタイルを拡大することで、メディア学部での学びの深化を推進するため、ふたつのキャンパス、ふたつの学び、を学部全体としても採用し、カリキュラムを構築した。学生は、東金キャンパスと幕張キャンパスとに開講されている科目を自由に選択することができ、地理的な問題から同日の連続時限での科目を履修できないというデメリットはあるものの、メリットが大きいカリキュラムといえる。学びの環境のメリットを優先し、「基礎ゼミⅠ」についても他の必修科目と同様に両キャンパスで開講することとした。同一科目名で両キャンパスで開講はしているが、通年科目でもあるため、学期途中での変更を認めないのはもちろんのこと、前期と後期との間での変更も原則認めないこととした。したがって、「基礎ゼミ」に関しては1年を通じて両キャンパスで異なる学びが進行することとなる。年次が上がる際に「基礎ゼミ」を履修するキャンパスを変更する学生がいなければ縦の統一性の問題は発生しないが、実際には変更する学生が少なからずおり、そうした学生の学びの統一性が確保されず、戸惑う状況が散見された。

②継続性

縦の統一性の問題は、学びの継続性の問題といい換えることができる。「基礎ゼミ」の履修キャンパスを東金キャンパスから幕張キャンパスに変更するにしろ、幕張キャンパスから東金キャンパスに変更するにしろ、完全分離方式で実施している場合には、学びの継続性が確保されない。それぞれに学びの重要性はあるが、学びが継続している状況の方が望ましいのはいうまでもない。変更した学生のうち大半はそれぞれに新たな学びに対応したが、それで問題が解消したとは考えられない。よりよい学びの環境というのは学びの継続性が確保されている状況である。異なる学びのよさをそれぞれ吸収できるというメリットがあるとも考えられるが、2年間継続しての学びを予定して「基礎ゼミ」の内容が構成されている以上、年次が変わる際にキャンパスを変更した場合には、継続性の問題に対してどのようなよりよい解決策があるのかを検討しなければならない。

以上のような2点の問題、統一性の問題と継続性の問題とを考慮して「基礎ゼミ」のあり方を再検討した結果、2010年度は、2008年度、2009年度と一部分離方式、完全分離方式へと展開してきた方向性を改め、再び、ひとつのキャンパス、ひとつの学び、つまり東金キャンパスでのみ「基礎ゼミ」を開講するカリキュラムへと回帰した。ひとつのキャンパス、ひとつの学び、になったことで、統一性の問題と継続性の問題とは解消した。

3. 目標・目的と学びと

(1) 「基礎ゼミ」の位置づけ

統一性、継続性を重視し、ひとつのキャンパス、ひとつの学び、に回帰した「基礎ゼミ」だが、すべての問題が解決したわけではない。残された問題のうち最も重要だと考えられるのが、学部の学びの目標・目的と「基礎ゼミ」の学びとの関係である。

「基礎ゼミ」は導入教育の軸をなす科目であるが、学部の学びの目標・目的の多様化に伴い「基礎ゼミ」の学びの内容が変容するのは自然なものといえる。ひとつのキャンパス、ひとつの学び、へ回帰したものの、東金キャンパスを中心に学ぶ学生と幕張キャンパスを中心に学ぶ学生とは目標・目的に差異があり、将来の学びへの導入・接続という点で考えた場合、「基礎ゼミ」の変容のあり方はより多様で多面になることが望ましいと考えることができる。また一方で、目標・目的に差異はあっても、これまで「基礎ゼミ」で実施してきた、読む力、書く力、発表する力、考える力などといった力や資格取得や就職対策といったテーマについては、さまざまな目標・目的のファンダメンタルズの分野であるため、そもそも変容する必要がないと考えることもできる。キャンパスが複数になったり学びが多様化したりする状況において、改めて「基礎ゼミ」の位置づけを明確にする段階にきているといえる。

(2) ニーズとの適合性

ひとつのキャンパス、ひとつの学び、による「基礎ゼミ」の運営では、学年全体にひとつの学びの形を提供することができ、特にさまざまな目標・目的のファンダメンタルズの分野を統一的に構築していく際には望ましい環境である。ただし、その運営上ではニーズとの適合性を今後も注視していかなければならない。

「IT・映像コース」ができる以前から、メディア学部では、情報・映像・デザイン・サウンドの4つのコア分野の学びが展開され、相互に密接にかかわる分野であると同時にそれぞれの分野に特殊性をもつ学びが行われていた。個々人の学びへのニーズはこれらの分野のなかで多岐に渡り、こうしたニーズを適宜組み込むことができなかつた内容については、学生からの評価は高いものとはいえなかつた³⁾。「基礎ゼミ」が目標・目的とするところの学びと学生の学びへのニーズとの適合を図りながら今後も進めていく必要がある。

³⁾ 過年度のニーズの分析と対応については、小淵ほか[2008]p.78を参照されたい。ニーズへの対応として、たとえば「基礎ゼミⅡ」でのアイデアコンテストがある。さまざまなメディア分野への興味があることを踏まえて、1つのメディア分野のみを選択するのではなく、各自が得意とするメディア分野のメディアツールを用いながら、考える力、編集する力、発表する力など「基礎ゼミ」の学びが目標・目的とするところの力の涵養を実施することができた。

おわりに

幕張キャンパスの開設という大きな学びの環境変化は、「基礎ゼミ」に多大な影響を与えた。結果としては、従来実施してきた形、ひとつのキャンパス、ひとつの学び、に戻った状況にあり、学びの統一性や継続性の問題を解決し、一定の方向性が見えた状況といえる。

しかし、また、新たな、大きな環境変化がメディア学部に起きることとなった。2011年度から始まる「映像芸術コース」の設置である。新コースは紀尾井町キャンパスにて展開され、「基礎ゼミ」も同キャンパスにて実施することとなった。新コース設置に伴い「基礎ゼミ」は「メディア制作ゼミ」と名称が変わる。その目指すべき学びは、名称に表出しているように“制作”重視となっている。

複数キャンパスがある場合に抱えるキャンパスと学びとの問題が再び生じることは確実で、また目標・目的とする学びの方向性の変更も注視しなければならない。これまで行われてきた「基礎ゼミ」の学びとどのように調和していくのか。一定の期間が経過したところで検証を行いたい。

参考文献

小淵究, 小波津美香, 寺本卓史[2008]「メディア学部における導入教育の再導入(2)」『城西国際大学紀要』第 16 卷第 5 号, pp.77-91。

